

医療維新

シリーズ 「医学部卒業後10-15年目の医師たち」～JCHO編～

医療維新

“全国区”の診療科で学ぶ誇りと苦労

父の背中を見て自然と進んだ医師の道 -テーマ4「急性期」Vol.4-

オピニオン 2019年3月1日(金)配信 JCHO東京山手メディカルセンター大腸・肛門科 中田 拓也

中田 拓也 Takuya Nakata

JCHO東京山手メディカルセンター大腸・肛門科 医員

【略歴】群馬県出身。2010年東京医科大学卒業。戸田中央総合病院（埼玉県）で医師臨床研修終了後、都立大塚病院での外科後期研修を経て、2015年4月より現職。

【所属学会・取得資格等】日本外科学会専門医、大腸肛門病学会会員



⇒JCHO尾身理事長が語る「急性期」はコチラ

私が医師を目指そうとしたきっかけとして特別な理由はなく、消化器内科医である父を見ていて、強制された記憶は一切ありませんが、高校入学時には自然と医学部受験を考えていました。運良く合格し毎年追試を受けながら進級、卒業。初期研修2年間を過ごした戸田中央総合病院で消化器外科医を志すようになりました。

父が消化器内科を標榜しておりましたので後期研修は内科だと漠然と思っていましたが、肌に合っていたというか2カ月の外科研修期間を終えた直後に思い直しました。外科の先生方から「外科やってたら内科もできるよ」と背中を押していただき鶴呑みにしましたが、今とてもそうは思えません。後期研修は大学の部活の先輩を頼って都立大塚病院の外科で3年間研修しました。当時の岡村部長をはじめとする指導医、先輩方からの熱心な指導と、同期との切磋琢磨の毎日で非常に充実した時間でした。その頃、教えていただいたことは今でも手術動画を見返すほど、自分の原点としていつも根底にあります。外科医として最初の3年間をこの環境で送れたことは本当に良かったなと思います。

後期研修終了後、現在の勤務先である旧社会保険中央総合病院（現JCHO東京山手メディカルセンター）へ入職。2014年に全国の社会保険病院が独立行政法人地域医療機能推進機構（JCHO）の直接運営に変わり、改称されました。日本有数のコリアンタウンである新大久保に位置する病床数418床の中核病院です。所属している大腸肛門病センターの歴史は長く、1960年、隅越幸男初代センター長が外科の中に肛門疾患を特殊に扱う部門として肛門病センターを発足させたのに始まります。1965年に外科より分離し肛門科として開設。1972年には痔瘻の分類として、現在に至るまで本邦で広く使用されている「隅越分類」を発表しました。

その後、大腸疾患の増加に伴い、1975年大腸肛門病センターと改称。1990年に岩垂純一前センター長、2006年に佐原力三郎現センター長が後を継いで現在に至り、肛門疾患のみならず、大腸肛門機能性疾患、大腸癌、肛門癌、その他大腸や小腸の炎症性腸疾患（IBD）に対し炎症性腸疾患センターをはじめとした各科と連携しつつ診断から治療まで一貫した医療を行い、日本大腸肛門病学会の肛門疾患部門では中心的な役割を果たしております。JCHOへの改称前、社会保険中央病院時代は「しゃほちゅう」と言えば大腸・肛門外科、というほど有名だったそうです。

スタッフ13人でも人出不足を感じる“全国区”での学び

スタッフは自分を含め13人と大腸肛門外科としては多い方かと思いますが、年間約2500例の肛門疾患手術と約600例弱の腹部手術の他、外来、大腸内視鏡検査等を行うにあたり人手不足は常に感じます。であるため手取り足取りでの指導はあまりありませんが、外科医4年目に就職した私にとっては助手として間近で見ているだけでも毎日新しい学びの連続でしたし、東京、関東のみならず全国から紹介されてくる患者からは、日本の肛門領域において当科がいかに重要な位置付けにあるのかを嫌でも認識させられました。

その後、執刀医としての担当も増え、助手の立場では分からなかった疑問や不安などで思い悩む日々です。肛門においては外来での診断に始まり、手術はほぼ良性疾患に対するものであり、長く議論されている根治性と機能温存という永遠の問題に直面し、その他に複数回手術を受けているIBD患者の癒着剥離や切除範囲の設定、術中・術後管理、限られた人員での腹腔鏡手術、内視鏡の挿入、診断、治療など課題を探せばきりがありません。しかしその分、担当患者が退院した時や退院後の初回外来に来られた時にはその度、反省点を思い返すと同時に達成感もあり、やりがいを実感できます。



佐原先生と手術中の様子

私は今まで大学の医局等に属さずに来たこともあり、外科医として直属の後輩はほとんどいませんでした。今は自分のことで手一杯ですが、いつか後輩ができたときには自分の経験で得たものを伝え、できる限りその力になりたいと思います。その時に現れるであろう新しい悩みもそれはそれで楽しみです。

個人的な将来としては父と同様にいずれ地元の群馬に戻り、地域に貢献できればと思っています。これまで学んだことを生かすためには施設の整備や連携体制など、さまざまな問題がありそうですが具体的に考えるのは「いよいよとなった時に」と先送りしています。当センターである程度の期間、勤務していたと言えれば周囲からの目も厳しくなりますが、その名に恥ずかしくないよう、これからも一つ一つ目の前の課題に取り組み、研鑽していきたいと思いません。



佐原先生（中央）が会長を務めた第73回大腸肛門病学会学術集会にて（後列右端が筆者）

「急性期」記事一覧

- ・ Vol.1 学会ロス乗り越え、脳神経外科のプロフェッショナル
- ・ Vol.2 「妊娠・出産でキャリアを諦めないで」女性外科医の助言
- ・ Vol.3 眼科領域の“大谷”目指す、NY留学経て野心に火
- ・ Vol.4 “全国区”の診療科で学ぶ誇りと苦労

⇒JCHO尾身理事長が語る「急性期」はコチラ

シリーズ 「医学部卒後10-15年目の医師たち」～JCHO編～ »